



安倍昭恵会長による祭文奏上

慰霊祭準備
「令和 8 年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の斎行日時については、令和 7 年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭終了直後の令和 7 年 7 月 5 日、靖國神社と調整した結果、令和 8 年 7 月 4 日（土）正午から斎行することに決しました。
令和 8 年度合同慰霊祭の開催日等をホームページに掲載するとともに、令

令和 8 年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第 6 8 号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋 1-5-7

東専堂ビル 2 階

電 話 : 03 (6380) 8943

F A X 03 (6380) 8952

<https://ireikyou.com>

振替口座 00140-6-334930

編集人 國澤輝生

発行人 國澤輝生

印刷所 (株)SG初スホールディングス

目 次

令和 8 年度合同慰霊祭斎行	1
代表理事（理事長）就任のご挨拶	6
あの戦争を振り返り戦没者の霊を慰める（第十九回）	7
事務局からの報告等	15
靖國カレンダーの紹介	16



慰霊祭当日朝の靖國神社

昨年度以来、参加費を値上げして開催の案内をしているため参列者の減少を危惧していましたが、主催各団体をはじめ賛助会員等関係者の積極的な協力を得て、慰霊祭当日までに多くの参加者から申し込みをいただきました。
また、合同慰霊祭当日の天候について、以前であれば 7 月上旬は梅雨末期の集中豪雨の時期であることに留意しなければなりませんでしたが、近年顕著になってきました、地球温暖化に伴う猛暑が原因で熱中症の患者が発生することを心配していました。

式典

和 8 年 4 月 1 日発行の当協議会広報誌『慰霊第 67 号』に掲載し、会員の皆様及び関係所団体等にお知らせしました。
その後、合同慰霊祭の諸準備に本格的に取り組み、5 月下旬関係する慰霊諸団体及び招待者等に案内状を発送しました。
このような中で実施された本年度の合同慰霊祭は、気温がぐんぐん上昇した昨年と異なり、朝から曇天が続いたため、風通しの良い靖國神社社殿と相俟って、涼やかで熱中症の心配をするには及びませんでした。



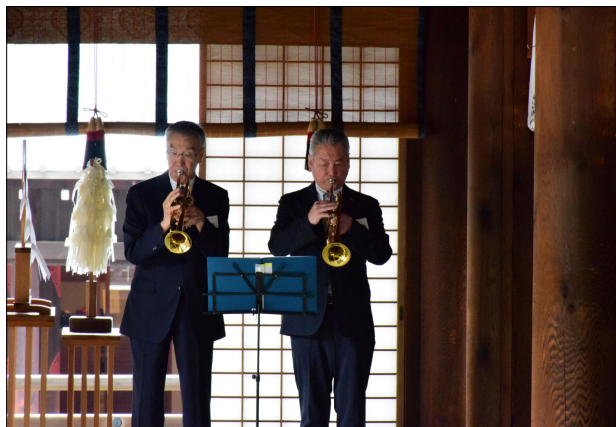
参集殿前の受付風景



石井副理事長 大塚宮司 安倍会長 宮下理事長



式典に臨む参列者



国歌斉唱の伴奏（左から堀田氏、佐々木氏）

式典は、慰霊諸団体代表を始め、参加を希望した会員等134名が参列し正午に開始されました。

神職の司会でトランペットの伴奏（堀田和夫氏・佐々木太氏）により全員起立して国歌を斉唱した後、神職による修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上と神儀が進められました。

祝詞においては、慰霊諸団体合同による主催の趣旨に鑑み、夫々の団体の戦没者への思いを込めて、当協議会参加慰霊48団体の団体名が奏上されました。

次いで安倍昭恵協議会会長が協議会参加諸団体を代表して次掲の祭文を奏

上し、今後も慰霊諸団体と連携し戦没者慰霊の永続に努力することを誓いました。

なお、本慰霊祭に際し、靖国神社での慰霊祭には出向けないが、在宅のまま靖国神社に向かい参拝したいとの申し出と共に玉串料をお寄せいただいた「在宅参拝者」が101名を数えました。

本年も参列者と在宅参拝者を合わせた235名と参加・協力をいただいた5団体が記載された「参拝者名簿」を祭文と共に神前に奉納しました。

次いで奉納演奏が行われました。まず、世田谷勇声カルテット「ガバ

ガバ」の皆様による「椰子の実」、「夏の思い出」の2曲の歌が奉唱され、美しい男声4重唱のハーモニーが御霊に届けられました。

次に参拝者一同で雄々しく戦場に散つて逝かれた戦没者に思いを馳せつつ、「同期の桜」と「海ゆかば」をトランペットの伴奏で斉唱し、歌声は神苑にこだましました。

その後、参列者一同はご本殿に昇殿参拝し、各慰霊団体代表者の玉串奉奠に合わせて拝礼した後、「国の鎮め」のトランペット演奏の中、しばしの黙



国歌を斉唱する参列者

祭 文

令和八年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を挙行するにあたり、戦没者慰霊諸団体を代表して、謹んで全戦没者の御霊に慰霊の言葉を捧げます。

大東亜戦争においては、多くの皆様が、祖国と同胞の安寧を願い、アジアの解放と繁栄を実現すべく、北は酷暑不毛、南は酷暑瘴癘、人跡未踏の密林などの各地へ赴き、勇戦敢闘されましたがこの間において二百三十数万余柱に及ぶ将兵の皆様が幽明境を異にされました。

故郷の美しい風景や愛しい御家族との楽しい日々に残しつつ散華された皆様方のご無念と、無事のご帰還を心待ちになさっていらつしやったご遺族の悲痛に思いを致す時、今なお万感胸に迫るものがあります。

今日の我が国の繁栄そして国民が享受する豊かで平和な生活と、アジア諸国の独立と発展は、皆様方の献身が礎石となつて築かれた

ものであることを忘れる訳には参りません。

しかしながら、先の大戦終結後、平和と繁栄が続いた今日、皆様とともに戦い、そして戦後我々を導いてくださった戦友の方々も年々鬼籍に入られる中で戦没者に対する国民の慰霊と感謝の思い、先人が遺された我が国古来の伝統的美徳が風化しつつあることが憂慮されております。

私も大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会は、戦没者慰霊諸団体と相携えて、戦没者慰霊事業の永続と、それを通じての国民道義の作興に寄与することを目的として日々活動しております。

あの夏の暑い日から八十年余の歳月が流れました。大東亜戦争の国難に敢然と立ち向かわれた全戦没者の勇氣と献身を、そして生還された戦友が皆様のご加護を得て懸命に成し遂げられた戦後の奇跡の復興に思いを致し、正しい歴史と崇高な精神の継承をはかり先人から託されたこの美しい国の平和と繁栄のために邁進すべく覚悟

を新たにするものであります。

また、百十数万余柱に及ぶ未だご帰還を果たされていない戦没者のご遺骨のご帰還についても、遺骨収集事業に携わる組織の一員として、お一人でも多くの方々に故国にお帰りいただけるよう全力を尽くして参る所存です。

どうか私どもにもお一層のご加護とお導きを賜らんことを冀つて慰霊の言葉と致します。

令和八年七月四日

戦没者慰霊諸団体を代表して

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会

会長 安倍 昭恵



黙 禱 時 「 国 の 鎮 め 」 を 吹 奏



世田谷男声カルテット「ガバーガバ」による献歌

直会

式典を終えて、参拝者一同靖国会館に移動し、2階の会場「九段・玉垣・田安の間」において1330からご来賓、参加各団体代表、賛助会員、JYMA学生等94名が参加して直会が執り行われました。

直会は、当協議会伊藤専務理事の司会により進められた。

直会の開始に先立ち、この度の式典及び直会を支援いただいたトランプト奏者（堀田氏・佐々木氏）及び世田谷男声カルテット「ガバーガバ」の皆様、次いで慰霊祭の準備段階から支援をいただいたJYMA日本青年遺骨収集団の学生諸氏を紹介し、感謝の意を表しました。

最初に、当協議会を代表して宮下寿広理事長が挨拶に立ち、本日の式典が滞りなく厳粛かつ盛会裡に終了できた



宮下理事長挨拶

こと、斎行に当たり参加各団体から絶大なご支援・ご協力をいただいたことに対し感謝の意を表するとともに、今後とも戦没者慰霊事業の永續のためご支援賜りたい旨の挨拶が述べられました。

次に、ご来賓を代表して、まず靖國神社大塚海夫宮司から、次いで本合同慰霊祭に是非参加したいとお申出をいただいた鹿嶋祐介衆議院議員からご挨拶をいただきました。

その後、本日参列の慰霊諸団体を代表して当協議会顧問の山谷えり子参議院議員が登壇され、ご挨拶を兼ねて献杯のご発声をされました。

その後の懇談会食は和やかな雰囲気の下、1時間余に及び、戦没者慰霊にかける思いが同じ者同士、戦没者への思い、お互いの慰霊活動や遺骨収集活動等を語らい意義深い懇談の場を過ご



大塚海夫宮司挨拶

しました。

懇談会食の終盤、式典において献歌をいただいた世田谷男声カルテット「ガバーガバ」に楽曲の披露をしていただきました。

最後はトランプト演奏に合わせ、戦没者を偲びつつ全員で「海ゆかば」を斉唱して締めくくられました。



鹿嶋祐介衆議院議員挨拶



山谷えり子参議院議員による献杯

合同慰霊主催団体

・公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
(以下五十音順)

- ・公益財団法人海原会
- ・英霊にこたえる会
- ・英霊の志を継承する会（永代会員）
- ・エラブカ東京都会
- ・岡山県郷友会
- ・鹿児島偕行会（永代会員）
- ・神奈川県偕行会
- ・旧戦友連（永代会員）
- ・駆逐艦菊月会
- ・熊本偕行会
- ・熊本歩兵第225聯隊戦友会（永代会員）
- ・群馬陸修偕行会
- ・甲飛喇叭隊
- ・国民保護協力会（永代会員）
- ・埼玉偕行会
- ・佐賀県偕行会（永代会員）
- ・NPO法人JYMA日本青年遺骨収集団
- ・震洋会（永代会員）
- ・公益財団法人水交会
- ・全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑奉賛会（永代会員）
- ・全国近歩一会（永代会員）
- ・全国甲飛会（永代会員）
- ・全国ソロモン会
- ・全国メレヨン会

・全ビルマ会(永代会員)

・ソ連抑留戦友・遺族会東京ヤゴダ会

(永代会員)

・公益財団法人太平洋戦争戦没者慰霊

協会

・公益社団法人隊友会

・筑後地区偕行会

・公益財団法人千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉

仕会

・航空自衛隊退職者団体つばさ会

・一般社団法人東京郷友連盟

・東部ニューギニア戦友・遺族会

・特攻殉国の碑保存会(永代会員)

・公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰

会

・豊橋歩兵第18聯隊戦友会(永代会員)

・日本郷友連盟(永代会員)

・ネービー21

・ハワイ明治会

・姫路偕行会(永代会員)

・福岡県偕行会(永代会員)

・宮崎県陸修偕行会

・山口県偕行会

・陸士第53期生会(永代会員)

・陸士第57期同期生会(永代会員)

・公益財団法人陸修偕行社

参拝者名簿

青木このわ 青木 和子 安達 弘典

穴吹 茂己

安倍 昭恵

天田 善信

平原 颯斗

平本 勝行

吹野 昇治

小林 博行

榊枝 宗男

坂本 強

荒木 文博

安藤 佳幸

飯田 美絵

福井 慎二

福井 正明

藤井 貞文

笹路 能也

佐藤 勇

佐藤 秀幸

池田 遼太

池田 縁

伊澤 大和

藤岡 勝博

藤森 博昭

藤森 裕美

沢田 進

島村 宜伸

清水 典郎

石井 光政

石井 浩美

石丸 禎一

藤原 一雅

藤原 ふみ子

藤原 利親

神野 義孝

杉村 克治

杉本 順則

市川 善浩

一戸 弥生

市原理恵子

藤原 淑子

鮎田 英一

星里 美

杉山 貞彦

鈴木 邦彦

精山 英人

伊藤 隆

伊吹 笑美子

岩浅 博之

細田 伸一

堀田 和夫

本多 健二

高市 晴通

高市 奈都子

高橋 芳幸

磐崎 文彰

上田 季久

上田 千絵

前嶋 香織

水野 博文

宮本 恭子

竹之下 和雄

館本 勲武

田尻 利重

内田 益次郎

卜部 桜子

江成 雅子

宮本 統麻

宮下 寿広

向井 実

田中 襲

谷川 孝司

辻本 直彦

榎本 葉子

及川 昌彦

大久保 英樹

村川 豊

米良 久美子

森 壮弘

中田 高芳

中村 里奈

西嶋 正幹

大曾根 蒼仁

大松 真二

岡澤 武彦

森本 浩吉

森本 益夫

山崎 文夫

二瓶 恵子

橋本 光彦

橋本 亀

岡田 昌幸

岡部 俊哉

小川 博之

山田 耕一

山田 眞大

山田 朱実子

島間 成允

林田 好広

東元 良惺

笠原 優紀

鹿嶋 祐介

金子 敬志

山谷 えり子

山本 瑛介

山本 光太郎

平田 啓介

平松 靖

比留川 多賀子

兼村 博之

亀谷 純令

菊田 教子

山本 千華

若木 利博

若松 寿美男

弘瀬 好子

藤田 浩和

藤沼 則夫

鬼頭 祐介

工藤 雅敏

國澤 輝生

渡邊 榮二郎

下地 尚美

星野 登志子

真弓 英之

三浦 誠哉

宮倉 崇

倉内 繁光

黒瀬 洋

小橋 正昭

小橋 恵美

(以上合計134名)

小島 健二

小長谷 丈晴

小橋 恵美

在宅参拝者名簿

青木 泰憲

青木 伸一

赤木 衛

山口 淨秀

山下 輝男

坂下 淳子

佐々木 太

佐瀬 正博

青木 泰憲

安藤 隆太

池田 由紀子

山本 勝久

山本 洋

山本 博幸

佐藤 壽紀

佐藤 正彦

佐藤 未果

網代 正孝

石黒 彰洋

石田 裕

吉川 洋利

吉田 三郎

吉田 康浩

佐野 己津男

鮫嶋 明子

志賀 政雄

池田 頼昭

磯田 健一

井上 裕之

米村 義一

若月 良介

若松 冬輝

清水 悟

神保 仁士

菅原 桃子

石橋 幸一

磯田 健一

井上 裕之

渡部 舟海

渡 正人

(以上合計101名)

杉本 正彦

杉山 良行

鈴木 育代

井本 尚宏

植田 和昭

内田 十允

逢坂 啓一

岡部 俊哉

織田 邦男

鈴木 優太郎

住吉 一俊

田井 宏幸

浦浪 臣晃

圓藤 春喜

逢坂 啓一

岡部 俊哉

織田 邦男

加藤 三千夫

高見 彦乃介

武井 邦晶

武田 正徳

大穂 孝子

大穂 園井

岡部 俊哉

織田 邦男

加藤 三千夫

東郷 会

竹本 佳徳

田宮 凜夏

千葉 昇

奥村 侑生市

小沼 芳子

織田 邦男

加藤 三千夫

中央乃木會

参加・協力団体

塚 純一

辻坂 俊範

寺澤 廣一

甲斐 正人

笠井 ありこ

川又 道弘

一般財団法人全国強制抑留者協会

ビルマ作戦協会

ビルマ戦歩兵第一六八聯隊遺族会

徳丸 伸一

富田 靖

中井 真人

狩野 隆平

神山 明

木村 圭作

ビルマ作戦協会

ビルマ戦歩兵第一六八聯隊遺族会

ビルマ戦歩兵第一六八聯隊遺族会

中川 法宏

中村 誠

中村 幹生

菊地 珠未

菊池 正通

久米 俊郎

久米 俊郎

久米 俊郎

久米 俊郎

中村 裕子

橋本 孝一

橋本 翔琳

久保田 光

熊谷 國彦

小林 稔

小林 稔

小林 稔

小林 稔

長谷部 拓真

日向 和敏

平野 醇

黒木 伸男

腰塚 浩貴

小林 稔

小林 稔

小林 稔

小林 稔

代表理事（理事長）就任のご挨拶



このたび、公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会代表理事を拝命いたしました宮下寿広です。身に余る光栄であると同時に、その責務の重さに身の引き締まる思いです。代表理事就任にあたり一言ご挨拶申し上げます。

先の大東亜戦争において尊い命を捧げられた国内外を合わせ約310万人の戦没者の方々、そして長きにわたり深い悲しみを抱えながらも、故人の名誉と慰霊のために尽力されてきたご遺族の皆様に、心より哀悼と敬意を表します。

当協議会は、戦没者崇敬に関する思想の昂揚と大東亜戦争における全戦没者の慰霊と顕彰並びに慰霊諸団体等が行う事業への協力を中心に、歴史の教訓を次世代へと確かに継承することを使命としてまいりました。戦争の悲劇を二度と繰り返さぬためにも、過去を正しく見つめ、平和の尊さを語り継ぐ

ことは、現代を生きる私たちに課せられた重要な責務と考えております。

代表理事として、慰霊事業のさらなる充実、遺族支援体制の強化、若い世代への平和教育・歴史継承の推進、国内外との連携による慰霊活動の深化に全力で取り組む所存です。戦没者の方々が遺された「平和への願い」を未来へとつなぐため、微力ではございますが誠心誠意努めてまいります。

しかしながら先の大戦が終結して80年の歳月が経過し、この戦いを経験された多くの方々が他界し或いは高齢化するに至っております。

当協議会は、この歳月の経過の中に、国民の戦没者に対する慰霊の心が風化しつつあることを憂慮しております。

このような状況を踏まえ、当協議会は今日の平和と繁栄の礎となった全戦没者に対して国民全体で尊崇と感謝の誠を捧げる慰霊と顕彰行事を通じて、皆様とともに戦没者崇敬の一層の高揚に寄与したいと強く願い日々活動して参ります。

今後とも大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会に対し、皆様方の一層のご理解・ご協力とご支援をお願い申し上げます。

令和8年5月吉日

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

代表理事 宮下 寿広

残暑お見舞い申し上げます

公益財団法人 陸修偕行社

会長 火箱 芳文
副会長 岩田 清文
相談役 森 勉
理事長 岡部 俊哉
副理事長 湯浅 悟郎
専務理事 本庄 俊弘
(兼事務局長)

公益財団法人 水交会

会長 河野 克俊
副会長 佐賀 幾雄
理事長 村川 豊
専務理事 山村 浩
事務局長 徳丸 伸一

航空自衛隊退職者団体 つばさ会

会長 杉山 良行
副会長 丸茂 吉成
副会長 片山 隆仁
副会長 谷井 修平
副会長 福永 充史
副会長 杉本 孝哉
専務理事 荒木 文博

公益社団法人 隊友会

会長 折木 良一
理事長 岩崎 茂
常務理事 武田 博史
常務理事 湯浅 悟郎
事務局長 山村 浩
事務局長 藤井 貞文

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長 藤田 幸生
理事長 岩崎 茂
副理事長 岡部 俊哉
専務理事 石井 光政
(兼事務局長)

公益財団法人 日本国防協会

理事長 岡部 俊哉
副理事長 藤島 正之
副理事長 日高 秀敏
副理事長 武居 智久
副理事長 鈴木 壮治
副理事長 井筒 俊司
副理事長 木原 孝志
事務局長 宮内 信行

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 安倍 昭恵
理事長 宮下 寿広
副理事長 石井 光政
専務理事 伊藤 隆
事務局長 國澤 輝生

軍学堂

医療法人社団伍光会

株式会社青林堂

特定非営利法人孫子経営塾

MO法人日本サイパンFRIENDSHIP協会

株式会社リアリ

『あの戦争を振り返り戦没者の
霊を慰める』 第十九回

東京裁判研究者

元くらしき作陽大学教授

松元 直歳

大東亜・太平洋戦争への前奏曲(Ⅱ)

戦間期の日米中関係から開戦へ

(その14) 満州事変から大東亜・太平洋

戦争へ…盧溝橋事件から日支間全面戦

争へー1937(昭和12)年頃に日本

が大陸で直面した困難(Ⅶ) 日本軍の

南京攻略⑨いわゆる南京事件(その六)

南京城外周辺陣地―各師団の戦闘

最初に、前回稿タイトルに誤りがありましたので、御詫びして訂正させていただきます。即ち、「1937(昭和12)年頃に日本が大陸で直面した困難(Ⅶ) 日本軍の南京攻略⑧いわゆる南京事件(その五) 南京城外周辺陣地に進出―白攻撃の態勢、整う」としましたが「白攻撃」ではなく、「城攻撃」でした。

今回第19回稿では、「南京城外周辺陣地」で戦った各師団の戦闘を、出来るだけ具に観察してみたい。余談であるが、昨今、ウクライナ戦争以降、戦

闘の方式が革命的に変化しているのは、周知の通りである。従って、殆ど肉弾戦にも近かった日本軍の南京攻略戦を振り返っておくことは、単なる歴史的な追憶になると懸念する向きがあるかも知れない。然しながら、戦争が、当然のこととして最終的な勝利を目指す場合には、最終的な戦いの様式は、歩兵による接近戦、肉弾戦(旧軍の語法に従えば「白兵戦」)を必要とすることが自明である。かてて加えてわれわれ日本人が、僅か90年弱前に、南京戦のような熾烈な肉弾戦(白兵戦)を実行したことは、それだけで、思い出しておくことが必要であろうと思うのである。

中支那方面軍の編成

さてすでに述べたが、日本軍は南京戦をどのような組織体制で戦ったか、それを今一度振り返っておきたい。即ち戦闘序列の概要である。

そもそも南京攻略戦は、1937(昭和12)年7月7日の中華民国軍による日本軍への攻撃―盧溝橋事件に端を発する第二次上海事変が発展したものである。戦いに任じたのは、第一次上海事変に続いて1937年8月15日に、松井岩根大将を司令官として編組された上海派遣軍であった。続いて10月20日、この上海派遣軍を増補すべく

柳川平助中将を司令官として第10軍が編成される。さらに、南京への進撃に伴って上海南方杭州湾より上陸した第10軍は11月7日、上海派遣軍と合わせて中支那方面軍に編成された。司令官には松井岩根大将が就任した。11月19日には、予め定められていた作戦地域を独断で超え、南京攻略の必要性を申し、この結果11月24日、戦域制限が廃止されて、12月1日、中支那方面軍

戦闘序列が下令された。そして12月4日から13日にかけて南京攻略戦が実行されたのである。なお翌1938年の2月14日には、南京攻略を終えた中支那方面軍は廃止され、新たに中支那派遣軍が編成された。

この上海派遣軍と第10軍から成る中支那方面軍の編成は、繰り返すことになるが、大胆に略述すれば、以下の通りである。

中支那方面軍戦闘序列

中支那方面軍司令官 陸軍大将 松井石根

中支那方面軍司令部 参謀長 塚田攻少将 参謀副長 武藤章大佐

上海派遣軍 司令官 朝香宮鳩彦王中将

第十軍 司令官 柳川平助中将

第三飛行団(以下詳細略)

中支那方面軍通信隊(以下詳細略)

中支那方面軍鉄道隊(以下詳細略)

第二野戦測量隊

第五野戦氣象隊

第三野戦築城部

中支那派遣憲兵隊

中支那方面軍直属兵站部隊(以下詳細略)

上海派遣軍戦闘序列

上海派遣軍司令官 陸軍中将 朝香宮鳩彦王

上海派遣軍司令部 参謀長 飯沼守少将

第三師団(名古屋、「藤田部隊」) 先遣隊

歩兵第六十八聯隊（岐阜、聯隊長 鷹森孝大佐）

第九師団（金沢、師団長 吉住良輔中将）

歩兵第六旅団（旅団長 秋山義兌少将）

歩兵第七聯隊（金沢、聯隊長 伊佐一男大佐）

歩兵第三十五聯隊（富山、聯隊長 富士井末吉大佐）

歩兵第十八旅団（旅団長 井出宣時少将）

歩兵第十九聯隊（敦賀、聯隊長 人見秀三大佐）

歩兵第三十六聯隊（鯖江、聯隊長 脇坂次郎大佐）

騎兵第九聯隊（金沢、聯隊長 森吾六大佐）

山砲兵第九聯隊（金沢、聯隊長 芹沢透大佐）

工兵第九聯隊（金沢、聯隊長 野中利貞大佐）

輜重兵第九聯隊（金沢、聯隊長 三田村正之助大佐）

第十三師団 山田支隊（仙台第十三師団の一部）

歩兵第三百三旅団（旅団長 山田梅二少将）

歩兵第六十五聯隊（会津若松、聯隊長 両角業作大佐）

山砲兵第十九聯隊（聯隊長 横尾潤中佐）

第三大隊（大隊長 行方正一少佐）※南京戦には第三大隊のみ参加

第十六師団（京都、師団長 中島今朝吾中将）

歩兵第十九旅団（旅団長 草場辰巳少将）

歩兵第九聯隊（京都、聯隊長 片桐護郎大佐）

歩兵第二十聯隊（福知山、聯隊長 大野宣明大佐）

歩兵第三十旅団（旅団長 佐々木到一少将）

歩兵第三十三聯隊（久居、聯隊長 野田謙吾大佐）

歩兵第三十八聯隊（奈良、聯隊長 助川静二大佐）

騎兵第二十聯隊（聯隊長 笠井敏松中佐）

野砲兵第二十二聯隊（聯隊長 三国直福大佐）

工兵第十六聯隊（聯隊長 今中武義大佐）

輜重兵第十六聯隊（聯隊長 柄沢畔夫中佐）

第一百師団（京都、師団長 伊東政喜予備役中将）

歩兵第一百一旅団（旅団長 佐藤正三郎予備役少将）

歩兵第一百一聯隊（東京、聯隊長 飯塚国五郎大佐）

歩兵第四百九十九聯隊（甲府、聯隊長 津田辰参大佐）

歩兵第二百二旅団（旅団長 工藤義雄予備役少将）

歩兵第三百三聯隊（東京、聯隊長 谷川幸造大佐）

歩兵第五百五十七聯隊（佐倉、聯隊長 福井浩太郎大佐）

騎兵第一百一聯隊（聯隊長 大島久忠大佐）

野砲兵第一百一聯隊（聯隊長 山田秀之助中佐）

工兵第一百一聯隊（聯隊長 八隅錦三郎大佐）

輜重兵第一百一聯隊（聯隊長 鳥海勝雄中佐）

師団通信隊

（以下詳細略）

上海派遣軍直轄機甲部隊（以下詳細略）

上海派遣軍直轄砲兵部隊（以下詳細略）

上海派遣軍直屬工兵部隊（以下詳細略）

上海派遣軍直屬兵站部隊（以下詳細略）

第十軍戦闘序列

第十軍司令官 陸軍中将 柳川平助

第十軍司令部 参謀長 田辺盛武少将

第六師団（熊本、師団長 谷壽夫中将）

歩兵第十一旅団（旅団長 坂井徳太郎少将）

歩兵第十三聯隊（熊本、聯隊長 岡本保之大佐）

歩兵第四十七聯隊（大分、聯隊長 長谷川正憲大佐）

歩兵第三十六旅団（旅団長 牛島満少将）

歩兵第二十三聯隊（都城、聯隊長 岡本鎮臣大佐）

歩兵第四十五聯隊（鹿児島、聯隊長 竹下義晴大佐）

騎兵第六聯隊（熊本、聯隊長 猪木近太中佐）

野砲兵第六聯隊（熊本、聯隊長 藤村讓中佐）

工兵第六聯隊（熊本、聯隊長 中村俊雄大佐）

輜重兵第六聯隊（熊本、聯隊長 川真田国衛大佐）

第百十四師団（宇都宮、師団長 末松茂治中将）

歩兵第二百二十七旅団（旅団長 秋山充三郎少将）

歩兵第二百二聯隊（水戸、聯隊長 千葉小太郎大佐）

歩兵第六十六聯隊（宇都宮、聯隊長 山田常太中佐）

歩兵第二百二十八旅団（旅団長 奥保夫少将）

歩兵第百十五聯隊（高崎、聯隊長 矢ヶ崎節三中佐）

歩兵第百五十聯隊（松本、聯隊長 山本重恵中佐）

野砲兵第百二十聯隊（聯隊長 大塚昇中佐）

工兵第百十四聯隊

輜重兵第百十四聯隊

国崎支隊（第五師団・歩兵第九旅団、旅団長 国崎登少将）

歩兵第四十一聯隊（福山、聯隊長 山田鉄二郎大佐）

第十八師団（久留米、師団長 牛島貞雄中将）

歩兵第五十五聯隊（大村、聯隊長 野副昌徳大佐）

歩兵第五十六聯隊（久留米、聯隊長 藤山三郎大佐）

歩兵第百十四聯隊（小倉、聯隊長 片岡角次中佐）

歩兵第百二十四聯隊（福岡、聯隊長 小堺芳松中佐）

野砲兵十二聯隊（久留米、聯隊長 浅野末吉中佐）

工兵十二聯隊（久留米、聯隊長 井沢新大佐）

輜重兵十二聯隊（久留米、聯隊長 川内益実大佐）

独立機関銃第八大隊

独立軽装甲車第九中隊

独立山砲兵第二聯隊（聯隊長 原田鶴吉中佐）

野戦重砲兵第六旅団（旅団長 石田保道少将）

野戦重砲兵第十三聯隊（聯隊長 橋本欣五郎大佐）

野戦重砲兵第十四聯隊（聯隊長 井手龍男大佐）

第一防空隊

第一野戦高射砲兵司令部（長 西田通久中佐）

第三師団第二十五・二十六・二十七・二十八野戦高射砲隊

第十六師団第一・二・三・四野戦高射砲隊

第三師団第三野戦照空隊

近衛師団第一野戦照空隊

第十軍通信隊

野戦瓦斯第六中隊・第八小隊

第四・七・十一・十二師団架橋材料中隊

第十六師団第一渡河材料中隊

第一野戦化学実験部

第十軍直轄兵站部隊

第三・五・七師団第二兵站司令部

第十六兵站輜重兵隊

兵站自動車第三・四・五・六・七中隊

第十軍予備馬廠

第十軍野戦予備病院

第十軍患者輸送部

第十軍第一・二兵站病院

第十軍兵站病馬廠

第一・二後備歩兵団

中支那方面軍の作戦経過概要

松井岩根大将を司令官、塚田攻少将を参謀長とした中支那方面軍は、上海派遣軍と第十軍を麾下として、総兵力約10万以上を以て、1937（昭和12）年12月4日、中華民国の首都、南京の防衛陣地への攻撃を開始した。偕行社『南京戦史』に従う。即ち、

上海派遣軍と第十軍は、十二月八日午後、外周陣地帯前面に進出し、

追撃の余勢を駆って中国軍の陣内深く楔入（せつにゅう）（隙間に打ち込んで割ったり固定したりする）した。十日から十二日にわたり主抵抗陣地戦で激戦が展開されたが、十日には光華門の一角を占領し、十二日には紫金山の山頂と中華門の城壁の一部を占領した。退路遮断部隊は、紫金山北方地区と南京城西側から下関に向かい突進した。

偕行社刊『南京戦史』

上海派遣軍と第十軍とに分けて概観

する。まず上海派遣軍である。

上海派遣軍の南京への追撃

その第16師団は、中島今朝吾中将を司令官とし、草場辰巳少将率いる歩兵第19旅団と佐々木到一少将率いる歩兵第30旅団より編成されていたが、主として北方より南京城へ攻め寄った。12月9日に「下麒麟門、蒼波鎮付近に進出して十日から十二日の間紫金山一帯の陣地を攻撃し、佐々木支隊は十二日紫金山北方地区を迂回して紛戦を交えつつ、中国軍の退路を遮断すべく十三日下関に突進した」。ここに紛戦とは「敵味方が入り乱れて激しく戦うこと」を意味する。

また上海派遣軍の最右翼は、第13師団の山田支隊が担った。同師団は、旅団長山田梅二少将を司令官として、両角業作大佐率いる歩兵第65連隊と、横尾潤中佐率いる山砲兵第19連隊の第3大隊（大隊長行方正一少佐）より成ったが、「遅れて鎮江を出発し、揚子江に沿って前進し十三日、烏龍山砲台、十四日に幕府山砲台を占領した」。幕府山で多数の捕虜を獲得したが、その処理について戦後論争的の一つとなる。また、吉住良輔中将を司令官とする第9師団は、第16師団、第101師団

と並んで上海派遣軍の中の大勢力であったと云えようが、秋山義允少将の歩兵第6旅団と井出宣時少将の歩兵第18旅団とから成った。更に、秋山第6旅団は、連隊長伊佐一男大佐率いる歩兵第7連隊と連隊長富士井末吉大佐率いる歩兵第35連隊とから成り、井出第18旅団は、連隊長人見秀三大佐率いる歩兵第19連隊と連隊長脇坂次郎大佐率いる歩兵第36連隊とから成った。

なお秋山少将は、日本敗戦の2日後、覺悟の自決を遂げた。ここに紹介しておきたい。

【上海派遣軍第9師団歩兵第6旅団長 秋山義允少将】

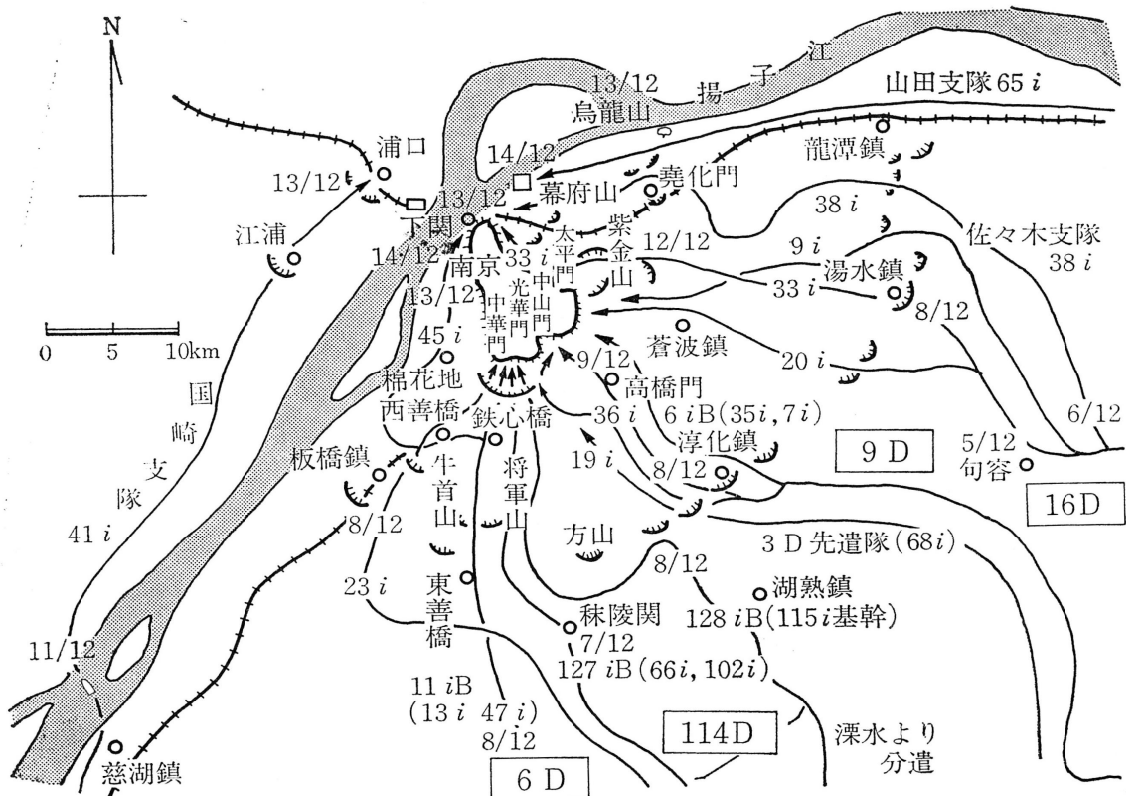
出典『ウィキペディア (Wikipedia)』



第6旅団長秋山義允少将

1886年、京都府で出生。1908年（明治41年）5月27日に陸軍士官学校第20期を卒業。12月25日に歩兵少尉任官。1920年（大正9年）に陸軍大学校第32期卒業。1932年（昭

要図6 南京付近戦闘経過要図



（偕行社『南京戦史』P.77）

和7年)陸軍歩兵大佐に進級する。1937年(昭和12年)3月に陸軍少将に進級し、第9師団隷下の歩兵第6旅団長に就任。同年7月に上海派遣軍戦闘序列に編入され、日中戦争に出動。第二次上海事変、南京戦に参加。後、善通寺師団長、昭和20年7月には、関東軍隷下の第137師団長。

1945(昭和20)年、終戦2日後の8月17日、北朝鮮咸興(李氏朝鮮発祥の地で冷麺の本場)で、自決した。額田坦の改訂版『世紀の自決』に従えば、以下の通り。

辞世 事しあらば千たび八千たびあらはれん 内外の敵にやはかけがさん
(万が一、重大な事態が起きたならば、幾度も幾度も姿を現して戦う。内なる敵と外なる敵に何で引けをとろうか、負けはしない)

自決した17日、早朝、齋戒沐浴(飲食や行動を慎み、からだを洗って心身のけがれを取ることにデジタル大辞泉)して辞世を認めた秋山中将は、いつもと変わらぬ態度で参謀長の報告を受け、たあと、午前11時あらかじめ準備した選擇所に向かった。すでに前日まで軍命令に基づく部隊の終結、移駐等の処置も終わり、随行した副官二人もなんら中将に疑問を抱かなかった。

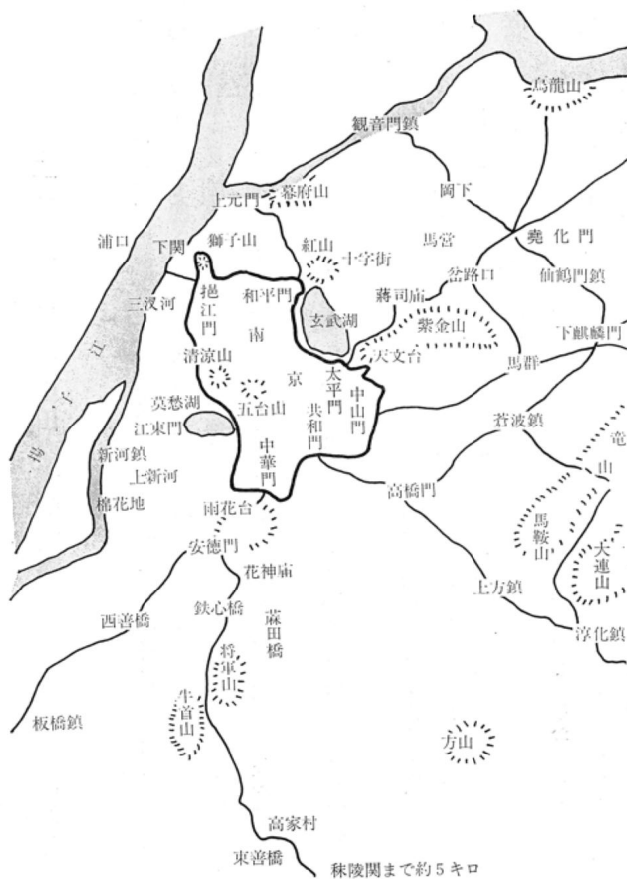
ここで初めて「自決する。平素からの信念であるから止めるな」と打ち明け、次級副官を警戒に立たすと、準備する間も「鈍刀だけど切れるかな」などと淡々と話しかけた。自決を思い止まらせようとした副官も、その決意の動かない事を知り遺言をたずねると、ただ「なにもない、介錯を頼む」と辞世を渡した。

正座して東方を選擇したあと静かに胸を開き、刀の柄頭を右に当てる、そのうえにうつ伏すように刀を突き刺した。ついで右に一字に切り開き、さらに上へ十字に切り上げると、刀を返し、柄を地面につけて頸動脈を切った。そして刀を傍に揃えてボタンをかけ、くずおれるように深く選擇したあと、身体をやや持ち上げ「お願いします」と副官に声をかけ介錯してもらった。沈着にして端正、古式に則った立派な最期だった。

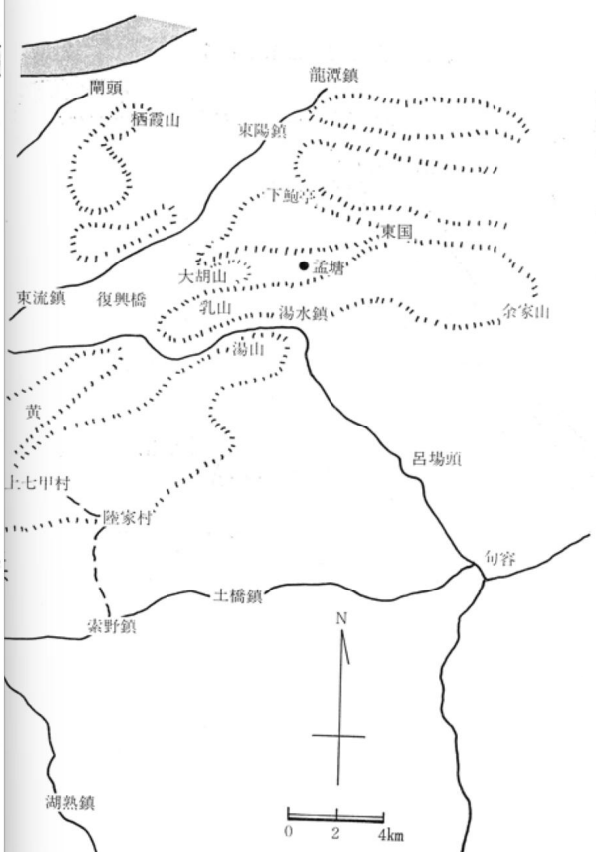
額田坦『改訂版 世紀の自決』

歩兵第19連隊長の人見秀三大佐もまた、終戦の翌年、昭和21年の4月13日、「戦犯の汚名、桎梏の辱しめを受ける」ことを潔しとせず、覚悟の自決を遂げた。

要図7 南京東方



南方地区概要図



(偕行社『南京戦史』P.78~79)

【上海派遣軍第9師団歩兵第18旅団歩兵第19連隊長人見秀三大佐
出典『ウィキペディア (Wikipedia)』



歩兵第19連隊長人見秀三大佐

1888年、山形県で出生。陸軍士官学校第23期卒業。7937年（昭和12年）8月2日に陸軍歩兵大佐に進級。同年11月22日、第19連隊長に就任。南京攻略戦、徐州会戦を戦った。1943年6月10日、中將に進級。10月29日、第12師団長に就任。最10方面軍戦闘序列に編入され、新竹に移駐し、台湾防衛にあたる。終戦後の1946年、台湾に進駐してきた国民革命軍より、4月14日の出頭を命ぜられる。4月13日、安藤利吉第10方面軍司令官らと会食が催されたが、その際に副官室で服毒し自決した。

同じく額田坦の改訂版『世紀の自決』に従えば、以下の通り。

人見秀三氏は庄内藩士の三男とし

て生まれ・・・昭和十八年、・・・第十二師団長に親補され、台湾南部の警備に任じていたが、終戦後、中国軍の管理下に入る前夜自決した。・・・歩兵の權威である氏の実兵指揮のうまさとは定評がある。その号令は、まさに天下一品でかん高い、よく通る美声と音量は、国軍中でも数少ないと言われた。歩兵学校に職を奉ずること久しく、・・・

人見中隊長は謹厳で、寡黙、しかも温顔で悠揚迫らず・・・責任感とは極めて強く、隊務にはまた頗る熱心であった。・・・中隊長自ら小隊長となり、長い刀を抜いて実践さながらに伏臥もし又、屢々、中隊長自ら擲弾筒（歩兵が携帯して小型の爆弾や手榴弾を発射するための小型の火器）を手に折敷の姿勢（左ひざを立て、右ひざを曲げて腰をおろす待機姿勢）で沈思することもあった。・・・

終戦時、氏は台湾軍剣部隊長（第十二師団長）として、台南に司令部を置いて、広範囲に亘る台湾南部西海岸の警備に任じ、敵の上陸に備えた。しかし、終戦後は、台湾南部地区の引揚援護を担当することになったが、高尾港より乗船する旧陸海軍部隊、一般邦人の引揚げを無事終了

し、全任務を完遂するや、中国側より、戦争責任者の一人として招致されたのである。終戦により、蒋介石軍（司令、陳儀）が全島を占領し、日本軍の軍司令官、師団長を招致したのだ。

しかし、氏は、戦犯の汚名、桎梏の辱しめを受けるよりは、むしろ帝國陸軍とその運命を共にする自決の道を選んだのである。

占領軍の管轄下に入る前夜、各司令官達はささやかな別れの宴を開くことになっていた。しかし、人見中將は、いつまでたっても、いっこうにその巨体を現わさなかった。

氏は、ただ一人、副官室の机の前に端座して瞑目に耽っているかの如くに自決していた。服毒によるものであった。・・・

遺書には、「孝銃、安全装置が解ケヌタメ、己ムナク薬ニヨル。薬ハ終戦前、自刃失敗ノ場合ヲ顧慮シテ用意シアリタルモノナリ」との旨、記してあった。

部下に対しても、

「余ノ任務ハ完了セリ第十二師団万々歳、此身ハ師団五十年ノ光輝アル歴史ト共ニ消滅スルコトヲ悦ブ。御皇室ノ弥栄ヲ祈リ奉ル。部下將兵ニ深

ク感謝ス。

第十二師団長 人見中將」
との遺書を残した。

さて、話を、「中支那方面軍の作戰経過」に戻そう。

吉住良輔中將の第9師団の追撃隊であるが、この部隊は、

上海派遣軍の南京への追撃（続き）

十二月八日、師団主力の支援を得て淳化鎮付近の中國軍陣地を突破し、夜間追撃を敢行して敵中深く楔入し、九日松晩にはその先頭は光華門前面に殺到した。師団主力は逐次戰場に到着し、秋山歩兵第六旅団は右翼隊となつて中山門東南方地区に、井出第十八旅団は左翼隊となつて、光華門、雨花台東部の敵を攻撃し、歩三六協坂部隊は、十日には「光華門一番乗り」を果たした。

第三師団は、第九師団の後方を追及していたが、十三日ようやく、その先遣隊（歩六八鷹森部隊）が第九師団の左翼に進出した。

偕行社刊『南京戦史』

第10軍の南京への追撃

では、上海派遣軍に対して第10軍の方はどうであったか。第10軍は、杭州

湾に上陸して、上海派遣軍を応援、相携えて南京城攻略に向った。

第十軍の南京への追撃

第百十四師団（末松茂治師団長）は、溧水より、七日秣陵（南京の旧名＝金陵）関付近の前哨陣地を突破して、將軍山方面に転進し、第六師団主力は、九日、牛首山付近の敵陣地を突破し、第百十四師団と共に雨花台一帯の本防御線を激戦の後占領して、十二日には城壁前面に進出し、歩四七は、十二日十二時二十分、中華門西側城壁を完全に占領した。

第六師団の牛島旅団主力は、南京・蕪湖街道方面より南京城に迫り、歩四五基幹の部隊は、十三日払暁、揚子江岸に沿い南下脱出しようとする中国軍大縦隊（縦に長く並んだ、行軍や突撃の際によく使われる基本的な隊形）を撃破し、その先頭部隊は十四日、下関に突進した。

国崎支隊は、十二月十一日、太平付近で発動艇により揚子江を渡り、十三日には南京の対岸、浦口を占領して完全に中国軍の退路を遮断した。

偕行社刊『南京戦史』

次に上海派遣軍と第十軍とを問わず、師団ごととその戦闘を見てみよう。

上海派遣軍第13師団Ⅱ山田支隊の戦闘

まずは、上海派遣軍の第13師団、支隊として戦列に参加した山田支隊である。支隊長は歩兵第103旅団長山田梅二少将で、主力の歩兵第65連隊は、両角業作大佐が率いた。山田梅二少将の横顔は以下の通りである。

【上海派遣軍第13師団第103旅団長山田梅二少将】

出典『ウィキペディア（Wikipedia）』



歩兵第103旅団長山田梅二少将

（1887年〈明治20年〉8月17日－1977年〈昭和52年〉11月13日）
最終階級は陸軍中將。

1887年（明治20年）、元一関藩士で仙台市長を務めた山田揆一の子として宮城県仙台市に生まれた。陸軍士官学校第18期卒業。1932年（昭和7年）4月1日に陸軍歩兵大佐進級と同時

時に陸軍士官学校予科生徒隊長に着任。

1934年（昭和9年）8月に陸軍士官学校学生部長に転じ、1935年（昭和10年）12月に陸軍士官学校附を経て、1936年（昭和11年）3月23日に仙台陸軍教導学校長に着任し、8月1日に陸軍少将に進級した。

1937年（昭和12年）11月に歩兵第103旅団長（上海派遣軍・第13師団）に就任し、上海戦に出動。南京攻略戦を戦い、徐州会戦では指揮下の歩兵第65連隊が一番乗りの戦果を上げたが、武漢作戦では大別山で悪戦苦闘の連続であった。1938年（昭和13年）11月に第3独立守備隊司令官に転じ、1939年（昭和14年）3月9日に陸軍中將に進級した。同年8月1日に東部軍司令部附となり、8月30日に待命、9月3日に予備役に編入された。1944年（昭和19年）11月27日に召集され仙台陸軍幼年学校長に就任した。

1947年（昭和22年）11月28日、公職追放仮指定を受けた

山田支隊の行動の概要

以下の通りである。

十二月二日、城門を爆破、江陰城を占領した第十三師団は十二月七日、主力は鎮江に向かい、一部（歩一

六新発田聯隊）は揚子江を渡って北岸・靖江城を抑え、揚子江の航行を安全ならしめた。

さらに十二月十四日、師団主力は鎮江から渡河して揚子江北岸に進出したが、十二日若松歩兵第六十五聯隊を基幹とする山田支隊には「烏竜山砲台ナラビ二幕府山砲台ヲ占領シ佐々木支隊ノ進出ヲ容易ナラシムベシ」との任務が与えられた。

支隊長は歩兵第百三旅団長・山田梅二少将、支隊には山砲兵第十九聯隊第三大隊、騎兵第十七大隊が配属されていた。

十二月十三日未明、進發した第一大隊は烏竜山砲台に向かい、午後烏竜山山頂に日章旗を掲げたが、烏竜山の日の丸を右に眺めつつ幕府山に直進した連隊主力二千余は、夕闇迫るころ、思いもかけず我に倍する中国兵の大軍に遭遇、これを武装解除しつつ十四日午前十時、輕戦の後幕府山砲台を占領した。

偕行社刊『南京戦史』

山田支隊の第5中隊長代理の角田栄一少尉の回想が残されている。

第5中隊長代理・角田栄一少尉回想

「あの日のことは忘れられない。

私たちは百二十人で幕府山に向かったが、細い月が出ており、その月明の中にもすごい大軍の黒い影が……。私はすぐ「戦間になったら全滅だな」と感じた。どうせ死ぬのならと度胸を決め、私は道路にすわって煙草に火をつけた。近づいたら大暴れするだけと思ったからです。クソ度胸というものでしょう。

ところが近づいて来た彼らに機関銃を発射したとたん、みんな手をあけて降参してしまっただけです。すでに戦意を失っていた彼らだったのです。」（『ふくしま戦争と人間』福島民友歳新聞社）

また歩兵第65連隊長、両角業作大佐のメモも残されている。

歩兵65連隊・両角（業作）連隊長メモ

「捕虜とした者は当初一万五千三百余、調べてみると南京から落ちのびた非戦闘員が含まれていたのだからこれを解放し、残りの八千人程度を幕府山麓の十数棟のホソナガイ建造物に収容したという」。

上記第13師団歩兵第65連隊の捕虜取扱については、論議の多い処であるが、

「戦史叢書」にみる捕虜対応の記述を引用しておく。

『戦史叢書』にみる捕虜対応の記述

「第十三師団において多数の捕虜を虐殺したと伝えられているが、これは十五日、山田旅団が幕府山砲台付近で一万四千余捕虜としたが、非戦闘員を釈放し、約八千余を収容した。ところがその夜、約半数が逃亡した。

警戒兵力、給養不足のため、捕虜の処置に困った旅団長（歩兵第百三旅団長山田梅二少将）が十七日夜揚子江沿岸に釈放しようとして江岸に移動させたところ、捕虜の間にパニックが起こり、警戒兵を襲ってきたため、危険にさらされた日本兵はこれに射撃を加えた。これにより捕虜約千名が射殺され他は逃亡し、日本軍も将校以下七名が戦亡した。」

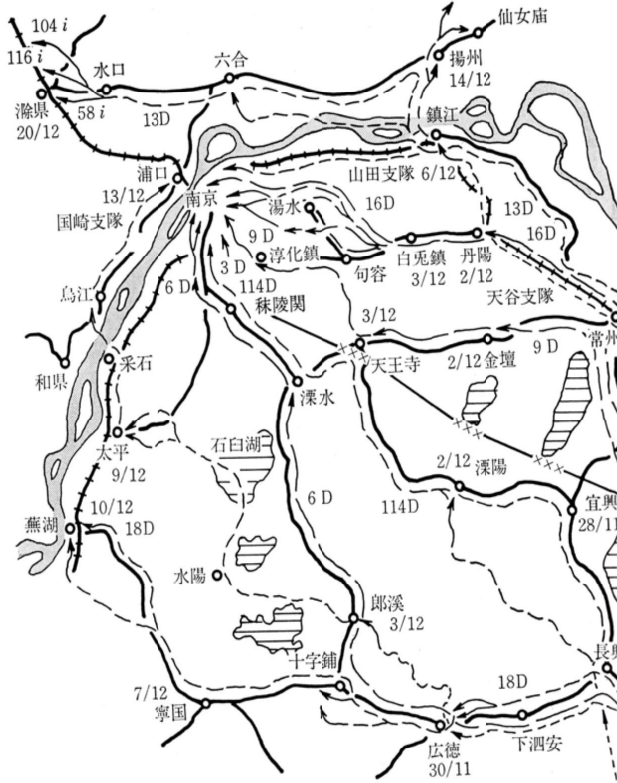
次には、第16師団の戦闘である。

（続く）

※編集担当からのお詫び

筆者松元様から前回稿タイトルについてお詫びと訂正がありました。原稿は「城攻撃」となっていたところを、編集段階で誤植したものです。松元様及び読者の皆様にご迷惑をお詫び申し上げます。

要図5 中支那方面軍作戦経過要図



（信行社『南京戦史』P.70～71）



事務局からの報告等

一 令和8年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の斎行

7月4日(土)、靖國神社において当協議会が参加諸団体と共に挙行した「令和8年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」は、会員団体・個人をはじめとする皆様のご支援、ご協力を得て滞り無く行事を斎行することができました。

なお、令和9年度の大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭は、令和9年7月3日(土)に行う予定です。

二 業務・会計監査の実施

4月28日、当協議会事務所において令和7年度業務・会計監査を受けました。監査の結果、事業は適正に行われており、経理についても異常は認められませんでした。

監査人

・中井 真人(公認会計士)
・山崎 文夫

三 令和8年度第1回通常理事会及び定時評議員会の開催

(一) 通常理事会

5月13日、当協議会事務所において令和8年度第1回通常理事会を開催しました。本会議では事務局から提出された議案について熱心な討議が行われた結果、それぞれ原案の通り承認され

ました。

議案

- ①令和7年度事業報告書
- ②令和7年度決算報告
- ③令和8年度定時評議員会の開催
- ④常勤役員の報酬月額改定に係る評議員会上程案
- ⑤役員の選任
- ⑥代表理事の選任
- 理事9名及び監事1名が出席

(二) 定時評議員会

5月28日、令和8年度定時評議員会を開催しました。本会議では事務局から提出された議案について熱心な討議が行われた結果、それぞれ原案の通り承認されました。

議案

- ①令和7年度事業報告書
- ②令和7年度決算報告
- ③令和8年度事業計画及び収支予算書(報告)
- ④役員及び評議員の報酬等並びに費用に関する規定の改正
- ⑤役員(理事)の選任
- ⑥評議員の選任
- 評議員6名が出席

四 硫黄島戦没者遺骨収集派遣参加

令和8年度第1回派遣(6月24日、7月9日)に陸修偕行社から1名が参加され、10柱を収容しました。

五 新入会員紹介 (敬称略)

(令和8年4月1日～8月25日)

【賛助会員】

安藤 佳幸 兼村 博之 簡 憲幸
工藤 孝一 高岡 レオ 永福佐代子
前坂 かおり 升田 晋造

賛助会員8名

寄付金の税額控除に係る

領収書等の送付について

当協議会は、租税特別措置法に基づく税額控除対象法人に認定されております。

従来から5000円以上の年会費・寄附金を頂いている方に領収書及び証明書(写し)を送付しておりますが、本年度も同様の処置をさせていただきます。なお、送付は12月上旬頃を予定しています。

また、5000円未満の方でも、確定申告にあたりこの領収書及び証明書(写し)をご希望の方は、遠慮なく電話・メール等で事務局までお申し出下さい。

会費納入のお願い

当協議会の活動は、会員の皆様の会費・寄付金等の浄財で成り立っております。

令和8年度年会費未納の方には払込取扱票を「慰霊第68号」に同封していますので、年度会費納入の際ご利用いただき、会費納入にご協力をいただければ幸いです。

新規会員獲得への協力をお願い

当協議会は、有志会員の皆様からお寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永續と充実を希う、多くの皆様の当協議会への入会を心からお待ち申し上げております。

既会員の皆様には、お知り合いの方の入会勧誘について、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会員の区分と年会費は 次のとおりです。

一 賛助会員

(本会の趣旨に賛同する個人)
年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

(特別御芳志の賛助会員)
年会費 五〇〇〇円

三 正会員

(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)
年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

(本会の趣旨に賛同する企業・法人団体)
年会費 一口一〇〇〇〇円

(一口以上)
*振込先口座番号(郵便振替口座)
〇〇一四〇・六・三三四九三〇

(当協議会へ事前に連絡をいただければ、振込料無料の振込用紙付「入会のしおり」をお届けいたします。)

「令和9年版靖國力レンダー」の紹介

英霊にこたえる会の「令和9年版靖
國カレンダー」が頒布されます。

頒布価格は、購入部数ごと下表の通りです。

購入ご希望の方は、購入部数に応じた下表の金額を郵便局（ゆちょ銀行）備え付けの「払込取扱票」を使用して振り込んで下さい。

なお、振込手数料はご本人負担となります。

カレンダーの内容は次の通りです。

靖國神社と護国神社の写真を中心に、季節感溢れる写真で構成しました。

●英霊にまつわる写真と遺書・逸話等を掲載しております。

●表紙サイズ… A4版
本文サイズ… A3版（見開き使用時）

■問い合わせ先

英靈にこたえる会

靖國カレンダー業務室

電話 03 (3264) 4610

FAX 03 (3261) 7415

Eメール
eirei@deluxe.ocn.ne.jp

ホームぺージ

<https://www.eireinikotaerukai.com>

■申し込みの方法

郵便局備え付けの郵便振替用紙に、

払 込 取 扱 票

00	口座記号・番号はお間違えのないよう記入してください。	
口座記号	口座番号（右詰めで記入）	金額
0 0 1 6 0 2	7 0 4 3 1	千 百 十 万 千 百 十 円

英霊にごたえる会 靖国カレンダー
業務室

金額	備考

振替払込請求書兼受領証

口座記号・番号	0 0 1 6 0 2	
	7 0 4 3 1	

英霊にごたえる会 靖国カレンダー業務室

金額	備考

令和8年度維持会費 口分 ￥

(9年版靖国カレンダー) 送料 ￥

合計 ￥

日 附 印

ご住所

ご芳名

電話番号

お名前

ご依頼人様

お住まい

お名前

日 附 印

消費税込

金額

円

ご依頼人様へ、おところ、おなまえをご記入ください。

ご依頼人欄に、おところ、おなまえをご記入ください。

靖國カレンダー申込金額表

単位：円

部 数 (維持会費口数)	カレンダー料金 (維持会費)	送 料	合計金額
1	7 0 0	3 0 0	1, 0 0 0
2	1, 4 0 0	3 5 0	1, 7 5 0
3	2, 1 0 0	5 0 0	2, 6 0 0
4	2, 8 0 0	5 0 0	3, 3 0 0
5	3, 5 0 0	7 0 0	4, 2 0 0
6	4, 2 0 0	1, 1 0 0	5, 3 0 0
7	4, 9 0 0	1, 1 0 0	6, 0 0 0
8	5, 6 0 0	1, 1 0 0	6, 7 0 0
9	6, 3 0 0	1, 1 0 0	7, 4 0 0
1 0	7, 0 0 0	1, 1 0 0	8, 1 0 0
1 1	7, 7 0 0	1, 1 0 0	8, 8 0 0
1 2	8, 4 0 0	1, 1 0 0	9, 5 0 0
1 3	9, 1 0 0	1, 1 0 0	10, 2 0 0
1 4	9, 8 0 0	1, 1 0 0	10, 9 0 0
1 5	10, 5 0 0	1, 1 0 0	11, 6 0 0
1 6	11, 2 0 0	1, 1 0 0	12, 3 0 0
1 7	11, 9 0 0	1, 1 0 0	13, 0 0 0
1 8	12, 6 0 0	1, 1 0 0	13, 7 0 0
1 9	13, 3 0 0	1, 1 0 0	14, 4 0 0
2 0	14, 0 0 0	1, 1 0 0	15, 1 0 0

令和9年版
英霊にこたえる
一億国民のこころを結集しよう
「靖國」カレンダー

「靖國」カレンダーを一家に一部掲げましょう

